

約束

2007(平成19)年11月9日鑑賞<角川映画試写室>

★★★★



監督＝アン・パンソク／出演＝チャ・スンウォン／チョ・イジン／シム・ヘジン／ソン・ジエホ／ユ・ヘジン（角川映画、CJエンタテインメント配給／韓国映画／110分）

第2章

映画は俳優で観る！

……ラブストーリーは数多いが、真正面から脱北者を主人公に据えたのはこの映画だけ……？ 「後から行くよ」がまちがいのもと。また、誤った情報によって行き違いが生ずるのも必然。すると、守ることができない「約束」はやはり存在するもの……？ 男と女の心の葛藤を学びながら、そんな重いテーマを考えてみよう。もっとも、脱北のイメージが報道番組で観るものと少し異なり、不謹慎にも少し笑ってしまったのは私だけ……？

意外に北朝鮮は自由でリッチ……？

舞台は2001年、ピョンヤン。「ぼくの名前はキム・ソノ。1975年10月10日、朝鮮労働党誕生の日に生まれて、今はマンステ芸術団でホルンを吹いている」というナレーションが流れる中、意外に自由でリッチな雰囲気 of 北朝鮮がスクリーン上に登場する。

彼と一緒に暮している両親や姉夫婦の様子を見ても、「何不自由なく暮していたばくら一家」というナレーションがピッタリで、決して誇張でないことがわかる。さらに、祖国解放戦争勝利記念館でガイドをしている恋人ヨナ（チョ・イジン）も、そのしゃべっている内容は決して上からの押しつけでなく、ハナからそう信じ込んでいることは明らか。言いたいことをハッキリ言えず、肝心なことはいつも口ごもってしまうソノ（チャ・スンウォン）に対して、ヨナは聡明で活発、そして物事を正面きって言うタイプだが、それがソノにとってはたまらなく魅力的。

そんな金正日体制下にドブプリと浸かった中で、若い2人の恋愛模様がピョンヤンのまちの中で展開されていくから、これを見れば若い男女の恋愛は全世界共通だと思ううえ、北朝鮮は意外と自由でリッチとってしまうが……？

事態は一転……？

ソノの父親（ソン・ジェホ）がピョンヤンでいい生活を送れているのは、父親の父親、つまりソノの祖父が祖国解放戦争で名誉の戦死を遂げたという功績のため。ところが、1994年7月8日に「偉大なる首領様」こと金日成が死亡した後は、父親の様子が少しヘン。そんな中、今日はある重大な決断が下されることに……。

両親と姉夫婦そしてソノが集まった席で、父親が「ワシは決めた」と語ったのは、何と南すなわち韓国への亡命。既にその決断を聞いていたらしい母親はうなずくばかりだが、ソノたちはとにかくビックリ。一体なぜ……？ それは、戦死したはずの祖父が韓国で生きていたのみならず、事業で大成功していることを知らせる手紙が父親の元に届き始めたため。もし南と連絡をとっていることがバレたら、家族全員の収容所送りは免れないはず。そう考えた父親は、脱北資金も脱北後の生活もすべて祖父が面倒を見てくれるという前提で、そんな大英断を下したのだった。

このように事態は一転したわけだが、それを文章にすれば、なるほどそうかと思うだけかも……？ しかし、そんな事態になっていることをしっかりと認識し、脱北しか道がないと決断するまでには大変な悩みがあったはず。幸いなことに自由で平和で豊かな社会を享受してきたわが日本では、これほどの生死を賭けた悩み事はないが、国際競争力が低下する中、数十年後の日本では……？

ここで面白いのは、朝鮮人は声もデカく、感情表現も豊かだし、決断も意外と早くスッパリしていること。事態が切羽詰まっているとはいえ、1回こっきりの家族会議でこんな決断を下したソノのファミリーは、立派と言うべきだ。

ヨナを誘うことは危険だが……？

一方で、こんな「決断」劇があった頃、なかなか「告白」できなかったソノに対して、何でもハッキリとモノを言うヨナが「正面突破」してきたため、2人の仲は目下絶好調。このままいけば、近いうちに婚約・結婚と自他ともに認める状況となっていた。そこで問題は、家族と共に脱北を決意したソノが、ヨナも脱北させるのかどうかということ。

この映画では、ソノの話に理解を示しながらも、ヨナは「家族の了解をとりつけたうえ、私も後から南へ行く。あなたは先に行つて」という決断になるのだが、どうも

私はこの話の流れに納得できない。そもそも、脱北は命がけの行動だが、もしそれが成功したとしても、残された関係者たちに甚大な影響が出るのは当然。すなわち、「手引きをした」「知っていたのに知らせなかった」「次はお前だろう」等々の疑惑が広がり、少なくともその後の監視態勢が強化されるはず。したがって、自他ともに認めるソノの婚約者ヨナは厳しい尋問を受けるとともに、その行動も厳しく規制されるのでは……？

また、ソノと家族の脱北に伴って、ヨナ1人だけが脱北するのか、それともヨナの両親や親戚一同も共に脱北するのかが大問題。しかも、そんな相談をしている時、もし1人でも裏切り者が出れば大変なことに。部外者の私がこんなことをいっぱい心配しているのに、ソノは意外と単純にヨナに対してコトの真相を打ち明けていたし、それを聞いたヨナは、前述のようなノー天気な答えをしていたが、そもそもそれが2人の悲劇を生む原因だったと私は思うのだが……。

どちらがホンモノ……？ 報道番組 vs. 『約束』

中国東北部の山奥で生活している脱北者たちの実態は、時々テレビの報道番組で放映されるが、それはほんとに悲惨なもの。しかしこの映画で観る限り、たしかに脱北は大変だが、なぜか笑いを誘うような雰囲気も……？

中朝国境にある凍った豆満江^{トウマンガン}を歩いて脱北する様子はテレビで観たことがあるが、闇を利用して、流れの中を全身水に浸りながら家族で手を繋いで渡っていく風景を観たのはこの映画がはじめて。腰の周りに巻いているビニール袋の中には貴重品が入っているのだろうが、ホントにこんな風にすれば脱北できるの……？ また、脱北を手配する手配師やその協力者がたくさん存在していることも報道番組で知っていたが、その実態はホントにこの映画に描かれているようなもの……？

脱北シーンのハイライトは、ドイツ大使館の中に逃げ込めばオーケーだが、入口を警備する屈強な男2人の妨害をどうやって排除するのかの相談と実践。ソノとその父親を警備兵に見立て、その突破訓練をする家族たちの姿を見ると、不謹慎ながら少し笑いがこみ上げてきたのは事実。何はともあれ、脱北に成功し韓国内に入ったソノたちだったが、何とその時は既に祖父は死亡。しかして、富裕な親戚たちは、脱北してきたソノたちに対してどのような対応を……？



©2006 CJ Entertainment Inc. & Sidus FNH. All rights reserved.

ソノの努力はカラ回りばかり……？

後にソノは、「自分は資本主義国に向いている」と面白いセリフを吐くから、それがホントかどうかはあなた自身で判断してもらいたい。しかし、少なくとも韓国に入った当初のソノが初心^{うぶ}だったことは明らか。

いろいろと大変な思いをしながらも韓国内でやっと落ち着いたソノは、直ちにヨナを脱北させるための作業にとりかかったが、それは具体的には手配師に依頼すること。今ドキは、日本の弁護士だって依頼人の金を着服する奴がいるのだから、韓国に弁護士の着手金に相当する「定着金」を受領するとすぐにドロンしてしまうインチキな手配師がいても、何ら不思議ではない……？ そんなベテランの手配師にしてみれば、ソノのような初心で事情のわからない脱北者は、赤子の手をひねるようなもの……。

定着金を分割ではなく一括で支払うと豪語したソノに対して、手配師は「どうやって金を準備したのか？」と尋ねると、ソノは得意気に「融資を受けた」と答えたところ

ろが面白い。なぜならこれは、それまで社会主義国の経済の仕組みしか知らなかったソノが、早くも資本主義国における銀行融資という経済システムを身につけたということだから……？

レストランのテーブルを挟んで、もっともらしく暗号の打合せをしている2人の風景はいかにもマンガ的だが、もちろんソノは真剣だし、必死の思い。すると、それが騙されたとわかった時のソノの怒りは……？

捨てる神あれば拾う神も……

怒り狂ったソノは、金を取り戻すべく悪党探しに必死。だって一刻も早く金を取り戻し、まともな手配師に再度依頼しなければ、ヨナとの「約束」が果たせないことになるのだから。この映画は、そんなソノの悪戦苦闘ぶりを面白おかしく描いていく。いや、そうではなく、ソノの必死の行動がなぜか逆に笑いを誘って……？

そんな努力の甲斐あって、ある日やっとソノは詐欺師を発見。何とその悪党は、今日もテーブルを挟んで、ある女性から定着金をふんだくろうとしており、さも重要そうにあの暗号の打合せを……。体力に自信のあるソノは、そんな詐欺師の首を締めあげ、「金を返せ！」と迫った。しかし、不運なことにこの詐欺師には仲間がいたから、後ろから頭をゴツンと叩かれ、その後もボコボコに殴られてしまったから、やはり素人探偵はダメ。

ところが、世の中「捨てる神あれば拾う神あり」とはよく言ったもの。チキン屋で働いていた女性キョンジュ（シム・ヘジン）から丁寧な介抱を受けたソノは、このキョンジュによって、次第に心の傷が癒されていくことに……。

北の人は商売上手……？

中国人も韓国人も商売上手だが、北朝鮮の人はもっと商売上手……？ 韓国で北の名物ピョンヤン冷麺を売りにした「モランボン・ライブ食堂」を開店させたソノの家族の団結力を見ていると、つくづくそう思ってしまう。ちなみにプレスシートには、ピョンヤン冷麺についての解説があるし、ヨナの「冷麺の汁が変わりましたね。調味料を入れすぎだわ」とのセリフがあるから、興味のある人は是非確認を。

それはともかく、今この食堂を切り盛りしているのは両親、姉夫婦の他、正式に結婚式を挙げて夫婦となったソノとキョンジュの合計6人。ソノがキョンジュとの結婚

に踏み切った直接のきっかけは、妊娠中の姉から「ヨナがお嫁にいった」と聞いたこと。もちろん、それを聞いたソノにさまざまな葛藤があったのは当然。この映画はそれについても実に面白く(?)描いているから、それは是非あなたの目で……。

テレビの情報力はすごい その1

さあ、映画はいよいよ中盤。「起承転結」の流れからすれば、ここで1つの転換が……? そう思っていると、テレビが大量の脱北者がほうほうの体で韓国内に入ったことを伝えたから、私のようにカンのいい観客(?)は、すぐに「ああ、なるほど」とわかるはず。もっとも、ソノがこのニュースに格別の関心を示さなかったのは当然。だってこの時点では、ソノは既に子供にも恵まれ、食堂の仕事に忙殺されていたのだから。

もっとも、スクリーンに集中している観客はすぐにピンとくるのだから、やはりテレビの情報力はすごい。その数日後、ソノのケータイにかかってきた電話は何と、定着支援施設内の女性がソノと会いたがっているというもの。ひょっとしてヨナが……? しかし、なぜ今頃……? ヨナは北で結婚したのでは……? そう思いつつソノは定着支援施設を訪れたが、それはもちろん妻のキョンジュには内緒……。

テレビの情報力はすごい その2

定着支援施設で再会したヨナから、結婚話は本当だったこと、しかし「一生後悔して生きるより、たとえ死んでもソノ同志に会いに行こう」と決意して、前日に結婚をやめたことを告白されたソノはビックリ。さらに、韓国政府の粋な計らい(?)によって、例外的に2人だけのデートが許されることに……。

プレスシートにある「完璧に再現された北の名所」という自慢話(?)のコーナーに書かれているとおり、北朝鮮で2人がデートするテソンサン遊園地やファーストキスを交わす柳の並木で有名なボトンガンの川辺などが見事に再現されているらしい。この映画の中盤の面白さの1つは、今日の韓国でのデートと、数年前の北朝鮮でのデートをダブらせながら紹介し、その楽しさと戸惑いをうまく表現しているところ。もちろん、この「再会デート」でも2人はキスを交わしたが、ソノの行為にどこかぎこちないところがあったのは当然。

しかし、テレビの情報力はすごい。有名なお店紹介の番組で、モランボン・ライブ

食堂を紹介してもらえるのはうれしいが、家族一同で出演したこの番組をひょっとして定着支援施設にいるヨナが観たら……。ついそんなことを考えていたためか、放映時のソノの表情はえらく固かったが、ソノが心配していたとおり、ヨナはこの番組を定着支援施設の中の食堂で、脱北仲間たちと一緒に観ることに……。

女心の葛藤は……？

ここまで「起承転結」の「転」の部分を描けば、「結」の部分をどうもっていくかは監督の好み次第。ただし、それがあなたの好みと合うかどうかは全く不明……？

しかし、いろいろと人生経験を重ねてきたあなたなら、ヨナの女心の葛藤は理解できるはず。もちろん、これが日本国内での男と女の話であれば、情報不足による決定的な行き違いと総括してキレイに別れ、原状回復(?)することも可能。しかし、既に命がけで脱北してきたヨナにその道はないことは明らかに。

すると、ヨナが選択すべき合理的な道は誰が考えてもソノのことを諦め、韓国内での自立と良き男性との結婚を目指すこと。しかし、そう簡単に諦めきれないのが女心。そこで正面突破型のヨナが「あなたが離婚できなければ愛人でもいい。一生あなたについていく」と述べるセリフのような選択肢も……。しかし、ホントにそんな道を選択すれば、ドロドロとした三角関係がずっと続いていきそうだが……？

男心の葛藤は……？

女のヨナも困ったが、男のソノも困った。今の生活には十分満足しているし、キョンジュと離婚すべき理由などどこにもない。ただソノの心の負担となるのは、ヨナとの「約束」を果たせなかったこと。しかし、これについては、「そうなったのは俺が悪いのではなく、北で他の男と結婚したという誤った情報のため」と自己弁護することはきわめて容易。したがって、ソノの第1の選択は、「俺のことをきっぱり諦めてくれ」と宣言するもの。

他方、ちょっとズルク考えれば、「ヨナは愛人でもいいと言っているのだから、この際家庭は家庭、愛人は愛人とうまくバランスをとって……」という選択肢もあるはず。そして、現在公開されている役所広司主演の『象の背中』(07年)を見ても、あるいは少し前の渡辺淳一原作の『失楽園』(97年)、『愛の流刑地』(06年)を見ても、その選択はそれほど責められるものではなく、ホントは多くの男が望む選択……？

地味！暗い！でも、すばらしい！

近時のハリウッド映画はシリーズもの、リメイクものも多く、社会問題と向き合い、その問題点をリアルに切り取った作品は少ない。現に07年のメガヒット作は、『スパイダーマン3』『シユレック3』『トランスフォーマー』『パイレーツ・オブ・カリビアン ワールド・エンド』『ハリー・ポッターと不死鳥の騎士団』『ボーン・アルティメイタム』などシリーズものばかり。ところが第80回アカデミー賞の作品賞と監督賞ノミネート作は地味で暗いテーマが並び、「ダーク・オスカー」の異名をとった。作品賞、監督賞はコーエン兄弟の『ノーカントリー』が受賞したが、これは金と欲をめぐる男たちの血なまぐさい闘いをリアルに描く作品で、とてもお子さまにはお薦めできないもの。また『ゼア・ウィル・ビー・ブラッド』は欲望の権化のような男（英国のダニエル・デイ＝ルイス）が主人公だし、『フィクサー』も15年間も Fixer = 「もみ消し屋」をしている弁護士（ジョージ・クルーニー）が主人公。この2人は主演男優賞を争ったが、結局ダニエルが受賞。他方『つぐない』は唯一正統派の文芸作品でア賞最適作だが、『JUNO / ジュノ』は妊娠してしまった16歳の女の子が主人公という「大穴」作品。助演男優賞も

おかつぱ頭で不気味な殺人鬼を演じた『ノーカントリー』のハビエル・バルデムが、助演女優賞も巨大農業会社の本部長役を演じた『フィクサー』のティルダ・スウィントンが受賞するなど、地味で暗い作品が大活躍！ さらに主演女優賞も、本命だったケイト・ブランシェットを押しつけて、「この街には本当に天使がいたのね」との名スピーチを披露した『エディット・ピアフ 愛の讃歌』のフランス人女優マリオン・コティヤールが受賞した。また日本勢は昨年、『バベル』の菊地凛子が助演女優賞候補、渡辺謙主演の『硫黄島からの手紙』が作品賞候補と頑張り、今年も浅野忠信主演の『モンゴル』が外国語映画賞候補に。惜しくも受賞こそ逃したもののよく健闘した。

そんな結果を私なりに総括すれば、第80回ア賞は、「地味！暗い！でも、すばらしい！」だが、これはアフガン戦争とイラク戦争を指導し、失敗に導いた(?) ブッシュ共和党大統領下における現在の暗いアメリカの時代状況を反映したもの？ すると、仮に来年1月オバマ民主党大統領が誕生すれば、再び明るくて前向きなハリウッド映画の名作が次々と登場するかも……？

2008（平成20）年3月5日